

S. Ashina

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって
 - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス 12/16
 - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義 1/6
6. キリスト教と政治理論
 - 6-1：現代思想のパウロ論 1/20
 - 6-2：イデオロギーとユートピア 1
 - 6-3：イデオロギーとユートピア 2

<前回>聖書学から社会教説へ

1. 聖書・聖書学→社会教説→社会学
 - ・自然神学としての聖書学、神学と諸科学との接点・コミュニケーション可能性。
神学と社会科学→人間学（人文学）、理念／現実
 - ・人格的社会的連関：親密圏、公共圏
2. トレルチ『社会教説』
 - ・Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912 (*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag)
 - ・『古代キリスト教の社会教説』（高野晃兆・帆苅猛訳）教文館。
4. 森田雄三郎「宗教史としての神学の意味、キリスト教的エトスの歴史性（トレルチ）」、
『キリスト教の近代性』創文社、1972年、217-277頁。
5. 『古代キリスト教の社会教説』より
 - ・社会的なもの、社会学的宗教的基本図式、基本理念
 - ・イエスの説教→絶対的個人主義と絶対的普遍主義
 - ・理念と社会形成

「かかる社会教説によって近代的な状況にとって何か有用なまた価値あるものになり遂げられるかどうかということだけが問題なのである」(17)

「歴史的な勢力としての教会並びにキリスト教はあらゆる点においてその過去によって、つまり聖書と共にたえず改めてその影響力を及ぼしてきた福音によって並びに社会生活及び文化全体に関係する教義によって、規定されるという基本的事実にぶつかる」(18)

「《社会的なもの》の概念はむしろ今日よく知られた意味において一般的な社会学的な諸現象の特定の狭く限界づけられた断面、即ち国家的な規制と政治的な関心から解放された或いはかかるものからは二次的にのみ問題とされる社会学的関係を意味する。この社会学的諸関係は経済生活、住民間の緊張、分業、階級分化並びに直接政治的と関係づけられない他の二、三の関心から生じるが」、「今日の状況によって特に強調されている《社会》

Gesellschaft と《社会的》social という言葉のこの狭い意味にわれわれは留まらねばならない」(24)

「近代科学が《社会》Gesellschaft という言葉で先ず第一に経済現象から生じる生活連関を考えているのは正しいであろう」(26)

「個人と共同体 Gemeinschaft の関係のキリスト教的秩序のような非常に普遍的な理念から生じる社会学的基本見解 (Grundanschauung) はあらゆる生の関係が何らかの方法で影響を及ぼすところの社会学的基本図式 (ein soziologisches Grundschema) を意味するのは確かにもちろんのことである」(26)

「はじめから、キリスト教のすべての社会教説は同時に国家と社会についての教説でもあった。その際にキリスト教の人格的なものから出発する思考形式にとって家族は同時に国家と社会の前提であり、それ故キリスト教の社会教説に属している。宗教的な共同体理論にとって家族、国家並びに経済社会は密接に結びつけられた社会学的形成物として現れることによって、今やけれども再び《社会的なもの》の概念が拡大されるのである」(28)

「第一節 福音」 Soziale Konsequenzen des Evangelisumus

「キリスト教の全体的な基本的方向を社会問題との連関において理解しようとする場合、決定的なのは、イエスの説教と新しい宗教教団の形成とは決して社会運動の創造ではないということ」、「中心にあるのは魂の救い、唯一神信仰、死後の生活、純粋な礼拝、正しい共同体組織、[キリスト教信仰の]実践的証明、神聖性に関するきびしい根本原則の問題」(36)、「神の国というのは至るところでまず第一に神によって支配される世界の倫理的並びに宗教的な理想状態である。」(37)

「[キリスト教の]一切のものの根底にあるイエスの説教に第一に《社会的》問題設定を持ち込むということはそもそも誤りである。イエスの説教は明らかに純粋に宗教的な説教であり、そして神について並びに人間に関する神の意志についての特定の思想から発したのであった」、「しかしこの宗教思想に社会学的問題設定を持ちこむこと、つまりこの宗教思想から個人と共同体の関係がどのように形成されるのか、ことごとくの大いなる思想に接続する社会学的構造をこの宗教思想からどのようにして掲載されるのか、を問うこと、こういうことは大いに許されうる」(58)

「イエスの説教の根本思想」「完成された神の支配の総括としての神の国の到来を告げること」、「神の国の来たることの保証を持ちまた準備のできている教団の集結」、「神の国はまさにあらゆる倫理的並びに宗教的な理想の総括である」(59)「心の純粋さ Herzensreinheit」「純粋な心情倫理の性格」「内面的な見抜き」(60)、「人の心底を徹底的に探り、一切のものをすみずみまで、またきわめて精巧な自己欺瞞をも見抜く神」(61-62)、「福音はきびしい徹底主義に至る。福音は禁欲 Askese ではない。しかし実行可能性に関するあらゆる制約を無視するきびしいものである。しかしその際無邪気な生の喜びは決して破られない」(62)

「この根本思想から社会学的構造が生じる。一方には無制約的なそして無条件的な個人主義がある。この個人主義はその尺度を純粋に自分自身のうちに、つまり神に対する自己検診に役立つものと思っているもののうちに持っている」、「この個人主義はその[その存在の]根拠と権利とを、人間が神との交わりの中にあることに、或いはここで表現に比べれば神の子であること」、「永遠の魂に召命されていることの中に根拠をもっている。神の子である個人は無限に価値あるものとみなされる」(64)、「宗教的な基盤においてのみ可能」「神との交わりだけが個人にこの価値を与えるのである」、「あらゆる現世的な

S. Ashina

のをおおう共通の神関係においてのみ」「自然的な区別は消える」、「一切のものを把握しかつ一切の地上的な区別を無にする神の全能と愛の力のなかでは」「その他の一切の区別が消されてしまっている」「個人への選別的差別化だけがかろうじて存続する」(65)、「この絶対的宗教的個人主義、つまり自分を重んじる人格性そのものの相違を残しながら、一切の[自然的]相違のこの止揚は特に宗教的な根本思想から生じる強い共同体思想を含んでいる」(65-66)、「利他的な戒め」(66)

「かくて絶対的な個人主義から同じく絶対的な普遍主義が生成する」(entsteht aus dem absoluten Individualismus ein ebenso absoluter Universalismus)、「ここでは宗教的な理念(aus der religiösen Idee)から直接生じる絶対的な個人主義と普遍主義という社会学的二重性(Doppelcharakter)だけがわれわれの関心をひくのである。両者は要求しあう」、「このことを行う人は神の国の兄弟姉妹であり、それ故来たるべき神の国の初子なのである」(67)

「ヘブライの意志の神は、人間から離れているが、専ら生ける啓示において、つまり律法と預言者において、イエスがこの二つを解釈する権威において自己をあらわすのである。それでもって社会学的な構造のなかへ権威思想が導き入れられる」(70)

「全く異なった関心圏に属する社会学的問題に対する[信仰者の]関係がどのように形成されねばならないか」、「こういう関係が現世に属し、現世と共に変わっていく」、「イエスの説教は禁欲的ではない」、「宗教的な価値に直接関係しない一切のものにおいては倫理的価値を全然承認しないという立場に立つ宗教的ラディカリズムが発現する。イエスの倫理は禁欲的というよりも英雄的である」(71)

「国家については語られていない」「イエスの神の国は神の支配を意味するのであって、ユダヤ民族の支配を意味するのではない。ローマの国家は、きわめてかざりけのない言葉で、存続すること権利を神によって与えられているものとして承認されている」、「経済生活は、未来のことは神にゆだねるとすれば、素朴な明快さでもって、その日の事とみなされる」、「犠牲的な、わかち与える愛」「が真の信仰の最高の証拠である。そしてあらゆる財への断念が真に伝道に命をかける弟子となる条件である。神は労働によってすべての人たちにその生活の糧を見つけさせたまい、そして困窮の場合には愛を働かせたもう、ということは富は魂にとって危険なものという見方と共に福音の立場に立つ唯一の経済教説である」、「宗教的に要求される愛は同時に生活の困窮をも片付けうる最も簡単な手段として証明される」、「消費が健康であり続けるためには、控え目でなければならない」「貧者への特別の方向づけ」(72)

「家族に対する彼の態度」、「イエスの弟子の原形姿、比喻の最も豊富な材料」、「一夫一婦の家庭における人格の個別化と家族結合の親密さは事実イエスの説教の宗教的個人主義並びに普遍主義と内面的に親しいものである」(73)、「あらゆる共同体生活の細胞、つまり家族に対して新しい社会学的理想が最も直接的かつ最も強く働きかける。しかしそれでも天国においては人間は性を失うであろう」(74)

「社会改革というような性格のプログラムは一切欠けている。そのかわりに現世の継続的な秩序のなかでありながら、愛の純粋に宗教的な共同体の中において、自己聖化の働きの中において神の国の到来に自らを備えるという要求がかかげられている」、「神の国そのもの」「社会的な新しい秩序ではない。この神の国は地上に新しい秩序をもたらす」(75)「説教のまわりに永続的な共同体が形成されると、このプログラムから一つの社会的秩序も生じること、最初、純粋に宗教的に考えられた社会学的構造が他の生活内の社会組織に

変るということ、これらのことが必ず生じる。少なくとも愛の掟は小さな、人格的に互いに結ばれた信仰共同体をその経済的態度においても規定しなければならないし、また愛の掟を実現する最初の試みへと人々を導かなければならない、「宗教的愛の共産主義」(der religiöse Liebeskommunismus)「愛の掟の内的衝動こそが「組織化を要求する」、「財を共有することを愛並びに宗教的犠牲の精神の証明とみなす共産主義」「消費の共産主義」「この共産主義における平等性の理念」(76)、「こういう共産主義はひょっとしたら小さな、同質的な教団のなかでは可能であったかもしれない。しかしこういう共産主義は世界伝道に対しては構造的にもまた基礎づけもあまりにも不安定であった」、「基本理念は魂の救いという理念に他ならない」、「それでもイエスの説教からは愛の共産主義という帰結が存続した。後の教団形成が困難な時には確かに再三愛の共産主義に近づいた」、「後の教父の理論的叙述」(77)、「革命的要素を含んでいる」、「現在ということに関しては教団はすでにパウロの時代から全く別の道を歩んでおり、しかも原理的には社会的に保守的な道を歩んで来た」(78)

「[福音の]思想全体を支配しているものはいずれにしてもこの社会的[性格をもった愛の共産主義という]帰結ではなくて、社会学的構造をもった宗教的理念から出発する理想的思想である」、「この理想的思想が十分に発展すると、この思想は人間関係を表わす社会学的基本図式を変更するだろう」

6. 理念：福音（説教）・神の国 → 社会学的図式：絶対的な個人主義と普遍主義
 → <歴史的状況> 社会的なものの形成：家族、経済、国家
 キリスト教の社会的三類型：教会、分派、神秘主義
 愛の共産主義

5. キリスト教と経済学説

5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって

(1) ウェーバー・テーゼの背景とアウトライン

1. 近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤
 - 宗教改革の精神（万人司祭） → 神の前における
 → 平等自立した個人と自由・平等（理念）
 - 西欧的な政治・経済・知のシステムとプロテスタンティズムの関係
 - 近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）
 - 近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）
 - 近代科学（マートン・テーゼ）
2. 宗教改革と近代との逆説的關係：ウェーバー・テーゼの場合
 - 近代キリスト教における新しい職業倫理・労働観と資本主義の精神
 - 両者の意図せざる逆説的歴史的な関係
3. ウェーバー・テーゼ（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫）
 - プロテスタントの職業観（Step 1） → カルヴィニズムの禁欲的エートス（Step 2）
 → 資本主義の精神（Step 3） → 資本主義の経済システム（Step 4）
4. ルターのドイツ語訳聖書
 - クレーシス（永遠の救いへの召し＝宗教的生活）とディアテーカー（割り当てられた労働） → Beruf: 世俗的労働＝神によって与えられた使命
 聖と俗の階層性の否定（万人祭司）、職業に貴賤なし、まじめさの意味がある。
 だから、人間は働くべきなのである。
5. カルヴィニズム：神の選びにふさわしい生活＝禁欲的エートス → 生活の合理化

S. Ashina

6. 資本主義の精神：勤勉、節約、正直、規律といった徳目によって構成された生活態度
資本主義経済の成立期にその担い手となった新興産業資本家はピューリタンであった（17-18 世紀のイギリス・アメリカ）。

正当な労働に対する正当な報酬としての富は神からの恵みである、公正な市場経済は神の意志を実現するのにふさわしい。

市場と隣人愛、他者の必要のために生産し流通させる。

（2）ウェーバー・テーゼにおける二つのレベルの交差

7. Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 1904/05 (J.C.B.Mohr, 1934)

8. 議論の二つのレベルの交差

論理的／心理的歴史的、必然的／偶然的

キリスト教的近代と近代的諸システム（民主主義、市場経済、近代科学）

9. ウェーバー・テーゼ：4つのステップから構成される論理構造

Step 1. プロテスタントの職業観

Step 2. カルヴィニズムの禁欲的エートス

Step 3. 資本主義の精神

Step 4. 資本主義の経済システム

10. テーゼの仮説性：

ウェーバーは、「Step 3」を「Step 1 と Step 2」の論理的帰結ではなく、むしろ意図せざる心理的効果であったと指摘する。また、「Step 3」は「Step 4」の成立を歴史的に支持するものであったが、しかし、一端成立した「Step 4」が「Step 3」の精神性を必ずしも伴うとは限らない。つまり、ウェーバー・テーゼの各項の関係は歴史的なものであって——しかも、多分に逆説的な——、論理的必然的なわけではない。論理的には別の仕方における経済システムの展開も可能だったのである。ウェーバー・テーゼに対する批判は当然、これらの論点をめぐるものとならざるをえない。

11. 梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム——神と富の間』（新教出版社、2010年）

現在なおも、ウェーバー・テーゼは、「個々の歴史的事例に関するヴェーバーの評価から、論証の方法、さらに全体的な歴史的見通しまで、幅広い分野」（梅津、2010、21）に及ぶ論争下にあるが、論争の中心は以下の通りである。

「近年のヴェーバー批判は、一つには、ピューリタニズムの「予定の教理」の心理的作用をめぐるものであり、もう一つには、「禁欲的生活態度」それ自身の反資本主義的性格をめぐるものであった。」（同書、33）

↓

現在の争点：Step 2 と 3 との関係、そして Step 3 と 4 との関係

12. 「予定の教理」の心理的効果に関して、梅津は次のように指摘し、Step 2 から 3 への歴史的展開について。

「ピューリタニズムの実践文献自体が、「予定の教理」に衝撃を受けた信徒たちを相手にしている事実がある。ピューリタニズムの信徒たちに間で、確かに救済の不安があり、「救済の確証」がもとめられた」、「信徒たちは、折に触れて「自己審査」を行い、日々行動を点検し、安定した行動様式、確固とした性格形成を行ったのであった」（同書、424-425）、「ピューリタン信徒の日常生活は、職業労働を中心とするものであった」（同書、425）。

13. 「ヴェーバー批判者が、批判の根拠として宗教倫理の反資本主義的性格を指摘したの

は、ヴェーバーへの反証とはならない。ヴェーバーが指摘したのは、職業労働の二重の意味であって、召命の側面を強調すれば批判者の主張となり、職業経営に焦点を合わせれば「資本主義の精神」に近づくのである。その場合でも、ピューリタニズムの倫理であるかぎり、宗教的な意味づけの枠内に止まることは言うまでもない。」(同書、426)

14. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上下』岩波文庫。

「われわれは、近代文化のもつ一定の特徴的な内容のうち、どれだけを歴史的原因としての宗教改革の影響に帰属せしむべきか、ということだけを問題とする」、「「資本主義精神」「は宗教改革の一定の影響の結果としてのみ発生しえただとか、また経済体制としての資本主義的経営あるいは宗教改革の産物であるというような馬鹿げた空論 (eine sotöricht-doktrinäre These)を主張したりしてはならない。資本主義的経営の重要な形態の或るものが宗教改革よりも遙かに古いということは、論者が私を批判する場合に用いるので有名になっているが、この事実だけからでもそうした空論が成立しえないことがわかる。われわれが確認しようとしているのはそういったことではなく、ただ、問題の「精神」の質的形成と全世界にわたる量的拡大との上に宗教的影響が果たして、またどの程度に与って力をあたえたかということ、及び資本主義的基盤の上にたつ文化のいかなる具体的側面がそうした宗教的影響に帰属せしめられるか(ob und wie weit religiöse Einflüsse bei der qualitativen Prägung und quantitativen Expansion jenes Geistes über die Welt hin mit beteiligt gewesen sind und welche konkreten Seiten der auf kapitalistischer Basis ruhenden Kultur auf sie zurückgehen)ということのみなのである」(上、137-138。S.83)

「さしあたっては、特定の形態の宗教的信仰と職業倫理との間に、果たして、またどの点で一定の「親和関係」(Wahlverwandtschaften)が認められるのか、ということを実明していくよりほかに道はない」(138)

(3) ウェーバー・テーゼと聖書

15. ルター訳聖書の問題

「この「職業」概念のうちに存在する非合理的要素はどこからきたのか(die Herkunft jenes irrationalen Elements)という問題」

「純粋に幸福主義的な利己心の立場からははなはだ非合理的な職業への献身」(上 94)

「「職業」を意味するドイツ語の》Beruf《という語のうちにも、また同じ意味合いをもつ英語の》calling《という語のうちにも一層明瞭に、或る宗教的な——神から授けられた使命(die einer von Gott gestellten Aufgabe)という——観念」(S.63)、「この語の現在の意味は聖書の翻訳に由来しているものであり、これも原文の精神ではなく翻訳者の精神に由来している(zwar aus dem Geist der Uebersetzer, nicht aus dem Geist des Originals)」(95, S.65)

16. Berufに集約された二つの観念

「註三」「ルターは、さしあたってまったく異なる二種の概念を》Beruf《と翻訳している(Luther übersetzt zweierlei zunächst hanz verschiedene Begriffe mit Beruf. S.66)。第一はパウロが用いているクレシスで、神によって永遠の救いに召される意(im Sinne der Berufung zum ewigen Heil durch Gott)である。1 コリント 1.26、エフェソ 1.18, 4.1, 2 テサロニケ 1.11、ヘブル 3.1、2 ペトロ 1.10 などはそれである」、「今日の意味における世俗的な「職業」とはいささかの関係もない(das Mindeste mit weltlichen Berufen im heutigen Sinne zu tun)」(103)、「第二」「ベン・シラの知恵 11.20,21」「わたしの知るかぎりでは、ドイツ語の》Beruf《が今日の純粋に世俗的な意味そのままに用いられた最初の場合である」(103-104)

「タウラーの美しい説教に見られる」(104)

「ベン・シラの知恵の訓戒は、七十人訳の語調からすれば、一般に神への信頼が勧告され

S. Ashina

る以外、世俗的「職業」に対して独自の宗教的評価(auf eine spezifische religiöse Wertung der weltlichen Berufs-Arbeit)などが加えられているのではないことは明白である」(105)

「一五三〇年のアウグスブルグ信仰告白は、世俗内的道徳のカトリック的軽蔑は益なしとのプロテスタンティズムの教理(das protestantische Dogma über die Nutzlosigkeit der katholischen Ueberbietung der innerweltlichen Sittlichkeit)を確定すると共に、その中で「各人はその Beruf に応じて」(einem jeglichen nach seinem Beruf, S.68)の語を用いたのである、「これは生活のすみずみにまで及ぶ神の個別的な摂理に対するルターの信仰がますます鋭い形をとるに至って結果である。」vocatio 《はラテン語の従来の用語法では聖なる生活、とくに修道院におけるまた僧侶たる生活への神の召命の意味に用いられたのであるが、右のような教義の力に押されて、ルターの場合には世俗内「職業」＝労働もそうした色彩を帯びる至った」(108)

「カルヴァン派は旧約外典を聖典外のものと考えていた。彼らがルターの Beruf (職業) 観念をうけいれ、これを強調するに至ったのは、事態の発展に伴っていわゆる「確認」(Bewährung)の問題が重視されるに至った結果であった」(109)

17. 宗教改革の職業観

「語義の場合と同じく、その思想も新しいものであり、宗教改革の産物であった (der Gedanke neu und ein Produkt der Reformation, S.69)」(110)、「世俗的日常生活の尊重の事実、その萌芽が何らかのすでに中世に、いやすでに古代（後期ヘレニズム時代）にさえも存在したことを否定するものではない」、「世俗的職業の内部における義務の履行をおよそ道徳的実践のもちうる最高の内容として重視したこと」

「修道僧的禁欲を世俗内的道徳よりも高く考えたりするのではなく、神によろこばれる生活を営むための手段はただ一つ、各人の生活上の地位から生ずる世俗内的義務の遂行であって、これこそ神から与えられた使命に他ならぬ、との考え」、「ルターにおいてこの思想の発展をみたのは彼の宗教改革の最初の十年間であった」(111)

「修道院の生活は神に義と認められるために全然無価値であるのみでなく、それは現世の義務から逃れようとする利己的な冷酷の産物であるとルターは考えた。それどころか、逆に、世俗の職業労働こそ隣人愛の外的な現れである (die weltliche Berufsarbeit als äußerer Ausdruck der Nächstenliebe, S.71) と彼は考えたのである」、「どんな環境にあっても世俗内的義務の遂行こそが神に喜ばれる唯一の道であり、これが、そしてこれのみが神の意志であって、したがって正当な職業はすべて神の前にまったくひとしい価値をもつ、ということのみがその後指摘されつづけたばかりでなく、ますます強調されていったのである」(112)

18. ルターの意義

「世俗の職業生活にこのような道徳的資格(diese sittliche Qualifizierung)をあたえたことが宗教改革の、またとくにルターの業績のうちで後代への影響のもっとも大きかったものの一つであることは、事実疑問の余地のないところであり、もはや常識(Gemeinplatz)といってもよい。こうした職業観は、パスカルが瞑想的な態度(Pascals kontemplative Stimmung)から、世俗的活動の尊重は虚栄或いは狡猾のみから説明しうるとの根深い確信によってこれを拒否する強い嫌悪の念とはおよそ縁の遠いものである」(116)

19. ルターの限界

「高利貸と利子取得一般を非難したルターの幾多の言葉のうちには、資本主義的営利の本質に対する彼の見方が後期スコラ学派の比しても(資本主義の立場からみて)はなはだ「立ち遅れて」(rückständige)いたことが、明白にあらわれている」(118)

「宗教改革そのものの影響はさしあたり次のような点にすぎなかった。すなわち、カトリ

ック教徒の見解と反対に、世俗的な職業労働に対する道徳的重視や宗教的報賞がいちじるしく高められたということである」(119)

「各人はひとたび神より与えられた職業と身分のうちに原則として止まるべきであり(*der einzelne soll grundsätzlich in dem Beruf und Stand bleiben, in den ihn Gott einmal gestellt hat, S.76*)、各人の地上における努力はこの与えられた生活上の地位の枠を越えてはならないのである」、「摂理の信仰に基づくものとなり、神への無条件的服従と所属への無条件的適応とを同一視するに至った(*Vorsehungsglaubens, der den bedingungslosen Gehorsam gegen Gott mit der bedingungslosen Fügung in die gegebene Lage identifiziert. S.77*)。このようにルターは結局宗教的原理を職業労働との結合を根本的に新しい、或いは何らかの原理的な基礎の上のうちたてるには至らなかったのである」、「倫理の領域における新しい立場の展開を阻止したのであった」(124)

「ルターの場合、職業の観念は結局伝統主義を脱するに至らなかった(*So blieb also bei Luther der Berufsbegriff traditionalistisch gebunden*)」(127)

「ルターが禁欲的自己訓練の傾向を行為主義として危険視し、そうした自己訓練はルター派教会ではますます背景に退かねばならなかったからである」(128)

「宗教改革はルターの個人的な宗教的發展から切りはなして考えられず、また彼の人格から長きにわたって深い精神的な影響をうけたとはいえ、彼の事業はカルヴィニズムなしにはとうてい外的な永続性をかちうるには至りえなかったからである(*wenn die Reformation ohne Luthers ganz persönliche religiöse Entwicklung nicht vorstellbar und geistig dauernd von seiner Persönlichkeit bestimmt worden ist, so wäre ohne den Calvinismus doch sein Werk nicht von äußerer Dauer gewesen. S.79f.*)」(131)

<参考文献>

0. 芦名定道「キリスト教と近代社会の諸問題」、『キリスト教と近代社会』(「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会、2010年度研究報告論集)、2011年、3-23頁。
1. 梅津順一『近代経済人の宗教的起源——M. ヴェーバー、R. バクスター、A. スミス』みすず書房、『ヴェーバーとピューリタニズム 神と富の間』新教出版社。
2. 柳父圀近『エートスとクラトス』、『政治と宗教——ウェーバー研究者の視座から』創文社。
3. 住谷一彦『近代経済人の歴史性と現代性』日本基督教団出版局、1984年。

社会科学叢書：

- ・ 鶴川 馨『イギリス社会経済史の旅』
- ・ 森岡清美『家の変貌と先祖の祭』
- ・ 住谷一彦『近代経済人の歴史性と現代性』
- ・ 永岡 薫『デモクラシーへの細い道——イギリスと日本』
- ・ 弓削 達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』

「現在、社会科学の専門分野で活躍するキリスト者が、社会科学を通じて、現代という時代を、あるいは広くさまざまな時代の歴史を、どのように把えてきたかを、また把えうるかを、世に問うシリーズ」